

# みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## An Analysis of the Optative Endings of the Subaši Manuscript of Udānavarga

|       |                                                                                                    |
|-------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-02-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 中谷, 英明<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00004412">https://doi.org/10.15021/00004412</a>                  |

## 「スバシ写本」の願望法語尾

——仏教サンスクリット成立の一局面——

中 谷 英 明\*

An Analysis of the Optative Endings of the Subaṣi  
manuscript of Udānavarga

Hideaki NAKATANI

Being one of the oldest manuscripts in Buddhist Hybrid Sanskrit, the Subaṣi manuscript of the *Udānavarga* (Fonds Pelliot, Bibliothèque Nationale de Paris) has unique characteristics, which show its extreme importance in clarifying how and why the Buddhist Canon began to be sanskritized in the first centuries of the Christian era.

Elsewhere I have demonstrated that the phonetical and morphological irregularities revealed in the sanskrit of this manuscript are closely related to peculiarities of North-western Middle Indic, namely the Gāndhārī. This, together with other circumstances, makes it possible to assume that sanskritization of this text was made from an original Gāndhārī tradition.

Detailed analysis in this paper on the use of optative endings not only confirms that hypothesis, but throws new light on certain so far unknown aspects of the transmission of Buddhist texts and the conditions of their sanskritization, particularly for the Sarvāstivādins in Central Asia.

### 0. はじめに

#### I. 問題のありか

1. 仏典のものと言葉
2. スバシ写本のサンスクリット
3. 研究の目標

### II. 願望法語尾について

1. 非サンスクリット形と音韻
2. 非サンスクリット形と韻律
  - 1) 同じリズムの正規語形へ
  - 2) 異なるリズムの正規語形へ

\* 神戸学院大学, 国立民族学博物館研究協力者

- |                        |                         |
|------------------------|-------------------------|
| 3) 非サンスクリット語形の容認       | 4. スバシ写本と「ガンダーリー・ダルマパダ」 |
| 3. 混淆形と中期インド語          |                         |
| 1) 混淆形の出現              | 1) 一致                   |
| 2) -eya の類形語尾          | 2) 乖離                   |
| 3) -eyā から -eyā へ      | 5. まとめ                  |
| 4) -eyya, -etha とパーリ語尾 | Ⅲ. 結語                   |

## 0. はじめに

1980年以来、民博の大型計算機を利用して、筆者はサンスクリット仏典の言語の研究を行って来た<sup>1)</sup>。入力したのは、1910年、ペリオが中央アジア・クチャーの北郊スバシ僧院跡で発見した *Udānavarga* の最古本である。ここにまとめたのはその中にあらわれる願望法語尾形についての考察である。紀元 300 年前後の書写と思われるこの木簡写本は、まとまって発見された梵語仏典として最も古いもので、仏教サンスクリット成立の鍵をにぎる。それまで中期インド語で伝えられてきた仏典が何故この期になってサンスクリット化されたか、という問に対する答えの一つを、この写本は与えてくれたように筆者には思える。

なお、仏教サンスクリットの専門外の人にも理解してもらえるよう、願望法語尾の分析に入る前に「問題のありか」という一章を添えた。

テキストの略号は *Critical Pali Dictionary* に従うが、次の 2 本のみは別である：P=Pali Dhammapada; G=Gāndhārī Dharmapada. また、頻出する文献には略号を用いるが、その略号表は p. 128 にある。

## I. 問題のありか

### 1. 仏典のもとの言葉

パーリの *Vinaya* に残る話によると (*Cullavagga*, V. 33. 1), ある時バラモンの出自で言葉使いの正しい二人の兄弟の仏弟子が、仏陀にこのように尋ねた。「お師匠様、こんにちでは雑多の氏族、雑多な生まれの者たちが出家しております、その者たちはそれぞれ己が言葉を使って (*sakāya niruttiyā*) 覚者のみ言葉をけがしております。

1) サンスクリット文献のコンピュータへの入力および分析作業のあらましを [中谷 1985] に報告した。

私どもが覚者のみ言葉をサンスクリットになおしとうございます。」仏陀世尊は厳しくいしました。「痴れ者。どうしてそんなことが言えよう。そんなことをしては、まだ心の澄んでいない人々のためにはならない。」そして比丘達にこう言ったといわれる。「比丘達よ。覚者の言葉はサンスクリットにしてはならない。もしする者があれば、その者は罪を犯したことになる。覚者の言葉はそれぞれの国ことばで学んでよらしい。」<sup>2)</sup>

この話がどの程度史実を反映するかの穿さくは今はおき、ともかく西紀初頭までは仏典は中期インド語で伝えられ、サンスクリット化された形跡がないことは事実である。

ただし、スリランカ・東南アジアに完全な三蔵経典が残るパーリ聖典を除いては、中期インド語仏典は殆ど現存せず、まとまったものとしては、辺境北西インドの古語ガンダーラ語で書かれた「ガーンダーリー・ダルマパダ」[BROUGH 1962]、およびチベットで発見され最近出版された「パトナ・ダルマパダ」[ROTH 1980]の2本が僅かに残るに過ぎない。

一方サンスクリット仏典の方は、19世紀前半に Hodgson の努力によって知られたネパール写本 [RĀJENDRALĀLA MITRA 1882] を嚆矢として、その後今世紀初頭には、ネパール写本 (13, 4世紀以降) より格段に古い (7世紀以降を中心とする) 西域写本 [WALDSCHMIDT 1965: XI-XXXV]、なお未刊行のものも多いギルギット写本 [STEIN 1931; HINÜBER 1982]、チベット写本 [SĀṆKṚTYĀYANA 1935] が続々と発見され、とりわけ第二次大戦後ドイツの学者を中心として発刊・研究がなされている途上である。これら仏典のサンスクリットは正規のそれではなく、その文法と辞書を編んだ Edgerton によって「仏教混淆サンスクリット」(Buddhist Hybrid Sanskrit) と呼ばれた、中期インド語の影響を多分に残すものである [EDGERTON 1953]。

この仏教混淆サンスクリットによる仏典が果たして中期インド語原本から翻書されたものかどうか、またそうとすればその中期インド語とは何か、に関する議論は Edgerton 労作以来にわかに高まったのであるが、なお結論を見るに至っていない<sup>3)</sup>。

2) sakāya niruttiyā という言葉の解釈は古くから様々に試みられて来た。今は Brough 氏の見解 [BROUGH 1980] に従う。

3) Edgerton の文法と辞書に対する夥しい書評だけでも20篇に近い。その主要なものは [RENOU 1957: 81-82] に挙げられる。中でも Smith [1954] は仏教サンスクリット固有の韻律の特徴と発展を強調、また Brough [1954] は写本の書きぐせ、伝承の地域的特性、内容に応じた文体的特徴等を考慮すべきことを指摘して重要である。

他方、最初期仏典の言語に関するシンポジウムが1976年 Göttingen において Bechert の主催で行なわれた [BECHERT 1980]。新資料もあらわれ、なお知識の深まりが期待される。また [HINÜBER 1983a] 参照。

付言すれば、チベット訳仏典の大半は、玄奘以降の漢訳（「新訳」）と同様、サンスクリット原本からの訳である。

## 2. スバシ写本のサンスクリット

さて、以上のサンスクリット仏典（およびチベット訳）の殆どが7世紀以後に属する中であって、Udānavarga のスバシ写本は群を抜いて古く、書体、内容などから紀元300年頃の筆写になると想定される<sup>4)</sup>。Edgerton の指摘のとおり [EDGERTON 1953: 4-5]、仏典のサンスクリットは時代を経るにつれ混淆形を排して古典サンスクリットに近づくのであり、古さからしてスバシ写本は最も混淆形を許容する写本の一つである。従って、下敷となった中期インド語を知るには最も適している。

## 3. 研究の目標

スバシ写本に見える混淆形（あるいは誤伝承）の特徴が、実は当時北西インドで行われていたガンダーラー（ガンダーラ語）と一致することを示し、少なくとも西域写本の古層（6世紀以前）の原本がこの言葉によって伝えられていたことを証して、仏教サンスクリットの成立過程の一部を明らかにするのがこの研究の目標である。

Edgerton は精力的にサンスクリット仏典を渉猟し、多数の混淆形を集積して我々に大きな便宜を与えてくれたが、若干地理的時代的考証の視点を欠いたうらみがある。私はスバシ写本の研究によって、たとえばその文法の「語形論」に単に並記される多数の混淆形が、派生関係から大巾に整理される可能性があることを指摘したい。

北西インド古語ガンダーラ語で書かれた現存仏典写本は、上述のとおり、「ダルマパダ」1本のみであるが、西紀初頭の数世紀間、仏教が中国に流布しはじめ定着しつつあった頃に、この言語の果たした役割は、実は極めて大きかったものと推定される。玄奘（7世紀）以前の漢訳仏典（旧訳）の過半がサンスクリット以外の俗語からの翻訳であったことは、漢訳者自身が証言するところだが、近ごろ、その俗語とはガンダーラ語に他ならない、とする説が提唱され、支持を得つつある<sup>5)</sup>。スバシ写本は、基語の特徴を多く残す点において、この言語に関する「ダルマパダ」、「ニヤ文書」、に次ぐ第三の証言とも言うべきものである。

スバシ写本の研究は、このように、仏典サンスクリット化の最初期の実例を初めて

4) 筆者のソルボンヌ・ヌベル大学提出 Ph.D. 論文参照 [NAKATANI 1978]。

5) 旧訳の音訳語は直接にはサンスクリット・パーリ語からは説明され得ず、ガンダーラ語を介してはじめて対応が可能となる [BAILEY 1946; BROUGH 1962]。なおガンダーラ語をそう名づけたのはこの Bailey 論文である。

提出し、仏典サンスクリット成立の状況を明かすとともに、「旧訳」の理解に前提となるべきガンダーラ語の実態を証言するものである。以下には、このような展望をもって行いつつある研究の中で、願望法語尾に関する結果を報告したい。

## Ⅱ．願望法語尾について

### 1. 非サンスクリット形と音韻

Udānavarga のスバシ写本242詩 (=Bernhard 本 [BERNHARD 1965] 20章第2詩) は、次のように、Pali 本 Nettippakaraṇa 中の一詩節 (p. 146) と対応する。

|              |                                 |                                |
|--------------|---------------------------------|--------------------------------|
| 242 (20-2)   | krodhaṃ <i>jahed</i> utpatitaṃ  | rāga(m) jātāṃ <i>nivārayet</i> |
|              | avidyā(m) <i>prajahe</i> dhīraḥ | satyābhisamayena sukhaṃ        |
| Nett. p. 146 | kodhaṃ <i>hane</i> uppatitaṃ    | rāgaṃ jātāṃ <i>vinodaye</i>    |
|              | avijjaṃ <i>pajaye</i> dhīro     | saccābhisamayo sukho           |

ここでは、願望法・3人称・単数・能動のアテマティックの正規語尾 *-et* は、絶対語末 (*avasāna*, Pāṇini I. 4. 110. 實際上、息つぎの直前) にあらわれ (*nivārayet*), 母音の前で正規連声に従って有声化する: *-ed* (*jahed*)。しかし有声歯音 *dh-* の前では非サンスクリット形 *-e* があらわれている (*prajahe*)。

表1はスバシ写本中で、願望法・3人称・単数・能動の正規語尾 (*-et*, *-yāt*) に対応するどの形が、どの語頭の前に出るかを回数で示したものである。

テマティック正規形 *-et* は *avasāna*, すなわち (實際上) 偶数行末に25回、無声子音の前で6回あらわれ、母音または有声子音の前では有声化して *-ed* となる (8回)。これに対して *-e* は11回あらわれるうち9回は有声音の前、7回は歯音の前である。有声歯音の前では正規形 *-ed* は2回しかあらわれず、実に4回のうち3回の割合で *-e* が使われていることになる。

写経生が絶対語末においてほとんど例外なく (26回のうち25回まで) *-et* を用いる事実は、これを正規形と認識していたことを示すだろう。にもかかわらず有声音、とりわけ有声歯音の前で *-ed* の *d* を落とすということは、*-e* は限られた音韻的コンテキストの下にのみ許容された書き方であった、ということを示唆する。

アテマティック形についても事情は同じである。 *hannyā* 5-19 (=skt. *hanyāt*), *siyā* 4-8 (=skt. *syāt*) という不正規形があらわれるのは、それぞれ有声歯音 *n-*, *l-*

表1 願望法・3人称・単数・能動の語尾と次の語頭

| 語尾<br>次の語頭 |         | テーマティック |     |      | アテーマティック |      |      |      |
|------------|---------|---------|-----|------|----------|------|------|------|
|            |         | -et     | -ed | -e   | -yāt     | -yād | -yā  | -yām |
| 無声音        | avasāna | 25      |     | 1    | 2        |      |      |      |
|            | k-      | 3       |     |      |          |      |      |      |
|            | p-      | 1       |     |      |          |      |      |      |
|            | s-      |         |     |      | 1        |      |      |      |
| 歯音         | t-      | 2       |     | 1    | 1        |      |      |      |
|            | d-      |         | 1   | 2    |          |      |      |      |
|            | dh      |         | 1   | 2    |          |      |      |      |
|            | n-      |         |     | 1    |          |      | 1    |      |
|            | l-      |         |     | 1    |          |      | 1    |      |
| 有声音        | a-      |         | 1   | 1    |          | 2    |      |      |
|            | u-      |         | 1   |      |          | 1    |      |      |
|            | g-      |         |     | 1    |          |      |      |      |
|            | j-      |         |     | 1    |          |      |      |      |
|            | bh-     |         | 1   |      |          |      |      |      |
|            | m-      |         |     |      |          |      |      | 1    |
|            | y-      |         |     |      |          | 1    |      |      |
|            | v-      |         | 3   |      |          | 1    |      |      |
|            |         | 正 規 形   |     | 不正規形 | 正 規 形    |      | 不正規形 |      |

の前である<sup>6)</sup>。また kūrīyām 18-10 の anusvāra (m) は (単に鼻音 n の表記形というより、実際に母音が鼻音化していたらしい; 後述 p. 119), 正規連声 -d m->-n (または -d) m- からの発展形にちがいない。

こうして、表1から次のことが言えるだろう。

- (1) 写経者にははっきりサンスクリット表記の意識があった。
- (2) しかし、ある限られた音韻的条件のもとで (おそらくは正式の発音があまり損われない範囲内で) 謂わば省略形として不正規形を使うことがあった。
- (3) その結果、稀にはあるが、省略形が、許容されない位置にもまぎれ込むことになった (avasāna における vivarjjaye 12-17<sup>7)</sup> など)。

6) 以後、語形を示すときはそれに対応する [BERNHARD 1965] における章番号、詩節番号を後置する。例えば、hannyā 5-19 は hannyā は Bernhard 本5章19詩に対応するスパン写本詩節に出ることを示す。

7) 前行末に vitarkkaye とあるのに引かれて書き誤ったものか。

## 2. 非サンスクリット形と韻律

### 1) 同じリズムの正規語形へ

表1に見たように、ふつつ中期インド語語尾 *-e* (ー) は、韻律上何らの変化をきたさない正規語尾 *-et* (ー) に置きかえられる。同様に、対応するパーリ詩節に見える反照態語尾 *-etha* (ーゝ) は正規形 *-eta* (ーゝ) に変わる: *bhajeta* 25-3; *mannyeta* 17-6<sup>8)</sup>。アテーマティック語尾についても同様である: *dajjā* (ーー) > *dadyāt* (ーー) 20-16。

同じリズムであれば、より顕著な変更も行われた。たとえば古層パーリ詩行において常に *spondeus* (ーー) に扱われる *kayirā* には<sup>9)</sup>、同じリズムの *kūryyāt* (= *kuryāt*) が(7回のうち6回)置かれる<sup>10)</sup>。同様に *jaññā* (ーー) も *jānet* (ーー) に換えられる<sup>11)</sup>。

更にまた同じ語根(語幹)ではリズムに違いが生じる時は、類義の別の語根(語幹)を使ってサンスクリット化が実行される。たとえば対応パーリ詩節の *jine*, ガーンダーリー詩節の *jīṇa* (または *jīṇi*) にスバシ写本は *jayet* で応ずる (20-19; 23-3)。またパーリにおいて、*kayirā* (ーー) とは逆に、つなぎ母音 (*svarabhakti*) *-i-* が1シラブルに数えられる *siyā* (ゝー) は<sup>12)</sup>、多くは(4回) *bhavet* (ゝー) に、一度 *vaset* (ゝー) に置き換えられるが<sup>13)</sup>、次のようにモーラで数えられ、*—=ゝ* という等式の成り立つ *vaitāliya* 詩行前部においては、一度だけ正規形 *syāt* が使われる。

|            |                                    |
|------------|------------------------------------|
|            | — — — / — ゝ — ゝ —                  |
| 162 (15-4) | <i>yasya syāt sarvvataḥ smṛtiḥ</i> |
|            | — ゝ ゝ — / — ゝ — ゝ                  |
| Ud. 7-8    | <i>yassa siyā sabbadā sati</i>     |

### 2) 異なるリズムの正規語形へ

写経者が韻律を熟知していたことは、最後の例を見ても明らかと思われる。*siyā* (ゝー) > *syāt* (ー) というリズムの変化がたまたまうまく韻律にのる時のみ、彼はこれを用いたのである。しかしながら、このようにサンスクリット化がリズムの変化を伴う時には、今のような幸便の場合を除いては、スバシ写本はそれを強く躊躇した

8) 後述 p. 125 参照。

9) (PLS §149), [HINÜBER 1983b: 77] 参照。

10) ただし、すでに原本に *kuya* (= *kuryāt*) という *gāndhāri* 語形を見たものと思われる。後述 4-1) 「一致」の項参照。

11) パーリ *jaññā* が類推語形であることは (PLS §145 (c)) 参照。

12) [SMITH 1951: 4] 参照。

13) *bhavet* は 13-7b, 23-10d, 30-25d, 17-9b。 *vaset* は 23-2d。

ようである。この点、サンスクリット化実行の爲の語順変更、意味のとばしい助辞の挿入 (pāda-pūrti) が繰り返される後代写本 (7-10世紀) [BERNHARD 1965] とは著しい対照をなしている。

次のような例は意識的変更というより、音韻上の混同の結果と見るべきだろう。

175 (16-2)      *vyāyamet tāva puruṣo*  
SN. I. 225      *vāyameth' eva puriso*

tāva(t) は次行の yāvat に触発されてあらわれたと思われる。願望法語形のすべての用例を通じ、著しい改竄が付されたのは次の2行である。

92 (9-6)      *ātmānā tan na kurvīla*  
Th. 496      *attanā taṃ na seveyya*  
  
324 (25-1)      . . (sakh)y(aṃ) n(a) (k)u(ru)v(i)t(a)<sup>14)</sup>  
Th. 1018      *sakhitaṃ na kareyya paṇḍito*  
G 228      *sakha na kari'a paṇido*

スバシ写本が古い伝承と最後の例のように大きく乖離することは全くの例外に属する。

要するにスバシ写本は、偶発的変改を除いては、できれば同じ語根、そうでなければ類義の語根を使って同じリズムのサンスクリット形をあてすることに満足し、それ以上に出ることを自ら拒んでいるかのようなのである。

### 3) 非サンスクリット語形の容認

すでに表1に見たようにスバシ写本は限定的に中期インド語語尾 -e を認めたのだが、より積極的に、中期インド語で -e の doublet として広く使われる -eyā の使用をも認めている。スバシ写本にこの形（およびその関連形）は20回使用され（後述、表3参照）、その trochaeus (—) あるいは spondeus (—) をその都度サンスクリット形 -et の longa (—) に変えることを断念したのである<sup>15)</sup>。

## 3. 混淆形と中期インド語

### 1) 混淆形の出現

こうして中期インド語形願望法語尾 -e, -eyā を認めたために、多数の混淆語形、つまり音韻上サンスクリット式に書かれるが、形態上中期インド語に対応する語形が

14) パーリ (Th.=Theragāthā), ガンダーリー (G=[BROUGH 1962]) の vaitāliya 詩行はここで śloka (pathyā) に改められているのであろうか。読みが断片的すぎて確定できない。

15) この語尾のリズムに関しては後述3-3) 「-eyā から -cyā へ」の項 (p. 120) 参照。

あらわれることになった。

たとえば *br̥ṃhaye* 18-5 は母音 *r̥* がサンスクリット様に復されているが語尾 *-e* は中期インド語形である。*kiliśyeya* 23-7 は語尾だけでなくつなぎ母音 *-i-* の保持（それなくしてはシラブル数が不足する）によって中期インド語形であるが、子音群 *śy* は中期インド語では同化する（おそらく北西インド語における同化 *śy > śś* をへた形だったと思われる<sup>16)</sup>）から、やはり混淆形である。*yaṃjeta* 24-21 は、パーリにはすでに見られ (IA §136-138), プラークリットにも (GPS §487-488) 一般的な傾向, そして仏教サンスクリットには「驚く程多い」と言われる (BHSG §28, 26) 接尾辞 *-ya* による現在語幹の増加傾向に抗そうとしてつい陥った行きすぎのサンスクリット化であろう。すなわち, たとえば本来 (ウパニシャッド以降の) サンスクリットでは挿入辞 *-n-* によって作られた *yuj-* の現在語幹 (弱語幹) *yuñj-* は, スバシ写本では *yujya-* としてあらわれ (*yujyanti* 27, *yujyeya* 459), *-ya* 幹へ移行している<sup>17)</sup>。原本の中期インド語におけるこの傾向を知っていた写経者は, これを正すつもりで必要のない *-ṃ-* を入れたと思われるのである。

この種の語幹にかかわる混淆形は, 枚挙にいとまがない。ここでは願望法語尾についてのみさらに考察をすすめる。

## 2) *-eya* の類形語尾

上の *br̥ṃhaye*, *kiliśyeya*, *yaṃjeta* の場合, その *-r̥-*, *-śy-*, *-ṃ-* がサンスクリット化とともにあらわれたものであり, 原伝承になかったことは殆ど確実である。では *-eya* の類形語尾 *-eyam̐*, *-eyā*, *-eyya* の場合はどうであろうか。以下に順次検討しよう。

- |            |                                              |
|------------|----------------------------------------------|
| 241 (20-1) | <i>krodha(m̐) jahed viprajaheyam̐ mānam̐</i> |
| P 221      | <i>kodham̐ jahe vip̐pajaheyya mānam̐</i>     |
| G 274      | <i>kothu jahi vip̐rayahe'a maṇa</i>          |

この *viprajaheyam̐* の末尾アヌヴァーラ (*m̐*) は, *Triṣṭubh* のカデンスリズム  $\sim\sim\sim\sim$  の短シラブル部分にあたるから, 長音表記としての *m̐*<sup>18)</sup> ではなく, 単に次に来る唇音による *a* 音の鼻音化を表わしていると考えられる。*-eyam̐* はこの一度しかあらわれず, 他の箇所では唇音の前でも *rakṣeya manasā* 7-3 のように書かれるか

16) (KDCT §40)。

17) Hemacandra も *jujjaī* という形を挙げる (IV. 109): *yujo jum̐ja-jujja-juppāḥ* [PISCHEL 1877-1880: 121]。また [BROUGH 1962] の §48 と Commentary on 238 参照。

18) (VB §2) 参照。

ら、この形をスバシ写本が容認する -eya と同列の語尾と認めることはできない。つまり単に音韻的コンテキストから生じた偶発的な形である。

しかしながら次の例に見られる -eyā は、まさに長音節が要請されるところに ā が置かれる。

116 (11-2)      kareyā nām <sup>~~~~</sup>kareyā nām dṛḍham eva parakkramet  
P 313            kayirañ ce kayirath' enaṃ dāḥam enaṃ parakkame

ここで kareyā とすれば偶数行のカデンスリズム (~~~~) になり、奇数行ではまず第一に避けるべき形に陥る。しかしスバシ写本の形は意味が平板であり(「それを行いなさい。それを行いなさい。さあしっかり励みなさい。」)、パーリ本の形<sup>19)</sup>(「なすべきことがある時には、それをなしなさい。しっかりそれに励みなさい。」)が本来のものとして推定される。すなわちスバシ写本の読みは二次的であり、そうとするならば、この読みへの改作者は願望法語尾 -eyā が -eyā でもあり得ると信じていたことをこの詩行は証している。

### 3) -eyā から -eyā へ

中期インド語におけるこの -eyā の対応語尾は、パーリでは -eyyā, プラークリットでは -ejjā であるが、実はこの末音 a の長短は、この中期インド語形語尾の成立に関する仮説にもかかわる。

Geiger (PLS § 128) はパーリの 2 人称・3 人称・単数 -eyya は、1 人称・単数 -eyyam および 3 人称・複数の -eyyam から類推で作られたと考えた。他方 Pischel (GPS § 459) は末音の長は本来のものと見なし、-ejjā はアテーマティック形から直接、たとえば \*karyāt > \*kariyāt > karejjā として、派生したものとした。

Bloch [1927: 109] は Geiger の類推説を取りつつも、それがアテーマティック語尾からの類推をも含むとして、謂わば Pischel 説を部分的に生かした仮説をとった。Edgerton (BHSG § 29, 24) もこの Bloch 論文に言及はせずに、ほぼ同じ立場を表明している(ただし末音節の長さについては Bloch は慎重に判断を避けた)。

Pischel(および (BHSG § 29, 25))説をとれば、末音 a は本来「長」でなければな

19) ただし kayirañ の読みは Dhammapada のタイ版, SN (I. 49) の PTS 版による (Fausbøll 本等の kayirā の読みは取らない)。スバシ写本 kareyā nām の n の読みは kayirañ の ñ から結果した可能性がある。kayira- < kārya- という解釈は [ANDERSEN 1907: 71] ([NORMAN & HARE (eds.) 1973: 23] もこれに従う) による。ただし、そうした時には kārya > \*karya という子音群の前における長母音の短縮を仮定しなければならない。Asoka 碑文においてこれが東部および中央平原に起こっていることは [TURNER 1967: 73] の指摘のとおりである。なお, [NAKATANI 1984: 138] 参照。

らない。たしかにすでに Aśoka 碑文中で -eyā と -eyā の両形が使用される (Bloch はおそらくこの点を勘案して末音の長さを特定しない)。しかしながらパーリ古層の詩節では末音は常に「短」扱いである。事実、古い伝承に忠実なスバシ写本においても、普通 -eya と書かれるだけでなく、韻律上、短が要請される 4 箇所はこの末音 ā があらわれ<sup>20)</sup>、逆に 1 箇所長を要する音節にあらわれる時は、上述のように後代改竄の詩節である。なお広く精査の要があるが、最も古くは -eyā であったと筆者には思われる。

Aśoka 碑文の表記 (-eyā), またサンスクリット仏典中で最古層に属するとされる Mahāvastu 中の詩節において既にこの語尾が末音に長を要する箇所にも短を要する箇所と同じ割合であられること (BHS § 29, 28), さらにプラークリットでは長音扱いが普通であること (GPS § 459), を考慮すれば、古く -eyā であったこの語尾は早く -eyā に移行したと推定され、上記スバシ写本詩節の改作者の時代にすでに -eyā が知られていたとして自然である。原本の韻律・音韻に忠実なこの写本の全般的傾向からしても、この kareyā の末音長は原中期インド語の反映であろう<sup>21)</sup>。

#### 4) -eyya, -etha とパーリ語尾

この -eyā がスバシ写本中で 1 度だけ -eyya と書かれる。

- 25 (4-8) hīn(ā)ṃ (dha)rmm(āṃ) na s(evey)y(a)  
pramād(e)na na s(aṃvaset)  
.....  
(na si)yā lok(a-var)d(dha)n(aḥ)
- P 167 hīnaṃ dhammaṃ na seveyya  
pamādena na saṃvase  
micchā-diṭṭhiṃ na seveyya  
na siyā loka-vaddhano

Aśoka 碑文では -eyā の y の 2 重子音化はまだ起こっていなかったとされるが (IA § 40), すでにパーリでは -eyya 表記である。最終行にスバシ写本では唯一例の (si)yā があらわれることと合わせ<sup>22)</sup>, この詩節が全体として中期インド語原本により忠実

20) 25-23b: y(aṃ) v(ā) nīndeya paṇḍitaḥ.

24-17b: b(ā)lo bhūñjeya bhojana (ṃ).

32-26b: an(u)yujy(e)ya p(aṇḍitaḥ)

26-1d: . . . (nāpa)v(a)deya kiñ cit (Triṣṭubh).

21) -eyā が古いとすると、この語尾の起源は再検討されなければならないが、今は詳論しない。

22) siyā は bhavet, vaset に置換される他, syāt として正規化される (上述 p. 117 参照)。

な正書法をとっていたのかも知れない。

また反照態語尾として一度 *-etha* が使われる。

373 (28-31)a (punya)m me k(r)t(a)n (t)i aś(va)seṭh(a)

G 204 puṇa ma kida di nanadi

韻律に疑問があり (Aupacchandāsika?), 従って写本の読み疑点が残るが、これまた中期インド語尾であったとして不自然ではない。

#### 4. スバシ写本と「ガンダーリー・ダルマパダ」

ここに詳論の余裕はないが、スバシ写本のサンスクリットの背後に想定される中期インド語は、「ガンダーリー・ダルマパダ」(2世紀頃) [BROUGH 1962] に見られる北西インド古語、ガンダーラ語と、音韻上極めてよく一致する<sup>23)</sup>。そこで以下に、両者の願望法語尾の比較を中心に考察をすすめる。

##### 1) 一 致

願望法テーマティック語尾に関しては、スバシ写本、「ダルマパダ」、パーリの三者間には、それぞれに固有の音韻を考慮すれば差異は無い。若干の差異が認められるのは、アテーマティック語尾についてである。

インド・アーリア語が、最古のヴェーダ語から、古典サンスクリット語もそれに属する古層インド・アーリア語、さらにパーリ語やガンダーラ語が含まれる中期インド・アーリア語へと発展する間に生じた顕著な変化の一つに、元来アテーマティック活用動詞のテーマティック化がある。この変化は、中期インド語の最古層に属するパーリ語において既に著しく、アテーマティック形は稀少、かつ活用の極く一部に限られてしまった。従って中期インド語のサンスクリット化には、当然、これを復する作業が伴うはずであるが、この点について、スバシ写本はむしろ消極的である。しかも数少ないそのアテーマティック形を、「ダルマパダ」中のそれと比較する時、両者の一致には注目すべきものがある。両本におけるすべての用例、およびその回数を、対応パーリ文中の語形と共に、表2に掲げる。

パーリの *kayirā* が *spondeus* (一一) と見なされることは上述 (p. 117) のとおりだが、これが、(PLS § 47.2) の考えた如く直接 *\*karyāt* を継承するものではなく、*karoti* をもとに *kuryāt* との混淆によって作られた類推形であるとする説が最近提出された [HINÜBER 1983b: 77]。この説の当否はなお検討を要するが、ともあれ

23) 詳細は [NAKATANI 1978: 77-132] 参照。

表2 アテーマティック形の比較（括弧内は使用回数）

|    | Subaśi Manuscript<br>(Sanskrit) (Middle Indic) |              | Gāndhārī Dharmapada                 | Pāli                                                 |
|----|------------------------------------------------|--------------|-------------------------------------|------------------------------------------------------|
| 1. | kuryāt (7)                                     |              | kuya (7)                            | kayirā                                               |
| 2. | kurvīta (2)                                    |              | kuvi'a (3); korvi'a (1)             | [kubbetha]<br>(cf. kayirātha, karey-<br>ya, sevcyya) |
| 3. | syāt (1)<br>(cf. bhavet (4),<br>vaset (1))     | siyā (1)     | si'a (6)                            | siyā                                                 |
| 4. |                                                | vyadhcyā (1) | vade'a (1)<br>(=vyatīyāt/*vyatheya) | —<br>cf. vyadhesi                                    |
| 5. |                                                | dadyā (1)    | daya (1)<br>(=*dāyā/*deyya/=dadyāt) | dajjā                                                |
| 6. | āpnuyāt (1)                                    |              | —                                   | [pappuyya]                                           |
| 7. |                                                | hanyā (1)    | —                                   | haneyya                                              |

バシ写本と「ダルマパダ」のこの形における一致は、この変化（パーリ内で後代におこったにせよ、より早くおこったにせよ）に両本が少なくとも関知しないことを示している。

次に, kurvīta (=kuvi'a, korvi'a) は, パーリでは kareyya, seveyya, kayirātha, kubbetha に相当する箇所にあらわれている。両本のこの形における一致は、二次的願望法語尾 -eyya の使用を好んだパーリとは対照的に、北西インド語は kurvīta というアテーマティック形の使用に慣れ親しんでおり、スバシ写本もこれに従ったという印象が強い。

ここで付言すれば、パーリの kubbetha も実はこの kurvīta の後継である可能性がある。(PLS § 129) はこれを単に kurvanti (=kubbanti) をもととするテーマティック化としか見なさないのであるが、パーリ古層には \*kubbe (および \*kubbeyya?) という願望法語形が欠けているようである。動詞 kr- の願望法におけるテーマティック化は kare, kareyya として実現していたのであって、kubbetha が kubbaye と共に孤立して使用されるのは、この形が当初 kubbanti と kurvīta の混淆形として取り入れられたからではなかろうか。つまり、頻度の差こそあれ、北西インド語、パーリ語、両語ともに kr のこの願望法語形を「頻用語形の例外的保存」として慣用していたように筆者には思われる。

## 2) 乖 離

サンスクリット化の結果、スバシ写本が「ダルマパダ」の形から離れることがあるのは当然である。サンスクリット形 syāt はヴェーダ期より既に2シラブルに数えら

れることもあり (VM § 147), Aśoka 碑文でも *siyā* が全インドを通じて用いられる。スバシ写本がこの語を *bhavet*, *vaset* とふつうサンスクリット化するのも、原本に *iambus* (ー) の *siyā* を見たからに違いない。

「ダルマパダ」の *vade'a* を [BROUGH 1962: 278] はサンスクリット *vyatīyāt* の表記と推定するが、むしろ意味上、\**vyatheyā* をあらわすと考えるべきであると筆者には思える。詳論は別の機会を待つことにし、今はスバシ写本の *vyadheyā* もこの推測を支持することを指摘するにとどめる。

「ダルマパダ」の *daya* は、\**dā-yāt*, あるいはむしろ \**deyya* の表記とされる [BROUGH 1962: 262]。普通にはパーリに近い読みを呈示する「パトナ・ダルマパダ」[ROTH 1980: 124] がここでは (293詩) *deyā* を呈示するから、第二の想定形 \**deyya* が妥当かも知れない。もしそうならスバシ写本の *dadyāt* はサンスクリット化時に導入されたものだろう。あるいは、「ダルマパダ」において子音群同化 *-ry- > -y-* が普通であるのを見る時、「与える」という意味のこの頻用動詞<sup>24)</sup>の活用形の一部において、*-dy- > -jj-* という同化が起こる前に、ガンダーラ語の特徴である擦音化 (spirantization) の前段階をなす後舌音化が起こり、*-dy- > -ḍy- > -ry- > -y-* という変化の結果 *dadyāt > daya* が生じたとも考えられる。

このように、「ダルマパダ」とスバシ写本の間には、アテマティック形についても、一致こそあれ差異は (*daya* は未解明として) ないと言ってよい。

ただし、両本の願望法語形には、ひとつ基本的な相異が存在する。それは、スバシ写本は、パーリと同じく願望法語尾 *-eta* と *-eyā* (パーリは *-etha* と *-eyya*)、すなわち反照態と能動態の区別を保持するのに対して、「ダルマパダ」はこれを失い、両形ともに *-e'a* としか表記しない点である。ニヤ文書における願望法語形の衰退を見る時 (KDCT § 100), この「ダルマパダ」の表記は、反照態語尾一般の衰退という大きな流れの一部を反映すると見なすこともできる。そうとすればスバシ写本における両語尾の区別はサンスクリット化による再導入ということになるが、北西中期インド語全体の再検討をへなければ結論は得られまい。将来の課題にとどまっている。

## 5. ま と め

以上がスバシ写本の願望法語形の概観である。表3には全語尾形を、使用回数および対応するサンスクリット、パーリ、ガンダーラーの語形とともに示す。

24) 動詞 *dā-* (与える) が種々の局面で特殊の音韻を呈する点については、[TURNER 1960: 27] 参照。

表3 願望法・3人称・単数の全語尾（括弧内は使用回数）

| 語尾<br>テキスト             | テーマティック                 |                                                 | アテーマティック                  |                                         |
|------------------------|-------------------------|-------------------------------------------------|---------------------------|-----------------------------------------|
|                        | active                  | middle                                          | active                    | middle                                  |
| Pāli                   | -e      -eyya           | -etha                                           | -yā                       |                                         |
| Gāndhāri<br>Dharmapada | -e<br>-i<br>-a          | -e'a                                            | -(y)a                     | -i'a                                    |
| Subaṣi<br>Manuscript   | -et (37)<br><br>-e (10) | -eya (15)<br>-eyā (3)<br>-eyya (1)<br>-eyam (1) | -eta (5)<br><br>-etha (1) | -yāt (10)<br><br>(si)yā (1)<br>-yām (1) |
|                        |                         |                                                 |                           | -īta (3)                                |

結論として次の諸点を指摘することができる。

(1) スバシ写本の、サンスクリット語尾を用いようとする意図は、たとえば絶対語末における -et の表記（26回中25回；表1 参照）に徴しても極めて明瞭である。また語尾変更（-etha>-eta など）だけでなく、語幹変更（jine>jayet; jaññā>jānet など）にも積極的である。

(2) ただし、中期インド語尾 -eya の使用をはば全面的に容認した。これは名詞曲用において女性 -ā 幹の具格・単数語尾として -āya（サンスクリットは -ayā）を用いる事実と対をなす<sup>25)</sup>。両形ともに使用回数が多く、かつサンスクリット化時にシラブル数の減少、リズムの変更が生じるため、一々の詩句改竄をあきらめたと推察される。

(3) しかしながらまた、上記の両原則、「サンスクリット語尾の使用」と「中期インド語尾 -eya の許容」、は一貫して遵守されるわけではない。ことに -e (= -et) の使用は、一定の音韻条件下においては正規形の使用をはるかに凌いでいる（表1 参照）。また -eyā は末尾長音を意識して使用される。

他方、-yā, -yām (= -yāt), -eyam, -eyya (= -eya), -etha (= -eta) の語尾、あるいは siyā という中期インド語形は一、二度しか使われず、かつ大多数の場合、使用動機を特定できない。絶対語末にも（26回に）一度 -e (= -et) があらわれるのを見る時、これらは写経者が原本に時として引き寄せられたものと思われる。

逆にまた、2例において -eya が (kurv)īta に置換される。

このように表記に一貫性を欠くのがスバシ写本の特徴の一つである。

25) たとえば, nityam vācāya samvṛtaḥ (7-8b) など。斜格全般に -āya が用いられ、サンスクリット形 -ayā は全く使われない。

(4) こうしてスバシ写本中の非サンスクリット形願望法語尾には、次の3種を区別できることが判る。

- 1) 全面的に容認された語尾（表3において下線を付す）：-eya。
- 2) ある音韻あるいは韻律条件下で、かつ半ば許容された語尾（破線を付す）：  
-e, -eyā。
- 3) 偶発的な語尾（イタリック）：-eyya, -etha, (si)yā, -eyam, -yām。

ただし第3種の語尾のうち、-eyya, -etha, (si)yā は、パーリにも対応形が見出され、中期インド語が紛れこんだ可能性が高いが、-eyam, -yām は実際の発音（音便）が綴りに写されたにすぎず、独立の語尾形ではないであろう<sup>26)</sup>。

また、第2種の -e は、後代サンスクリット仏典では音韻上の制限なく自由に使われるが、その起源はここに見られるような一定条件下の使用にあると考えられないだろうか。

(5) 「ガーンダーリー・ダルマパダ」(2世紀頃)との比較は、願望法語尾形についても両本がよく一致することを明らかにする。両本ともに、kuryāt, kurvīta の使用を好む。ただし、「ダルマパダ」は -eta に相当する反照態語尾を失っているのに対し、スバシ写本はこれを保持する。この点に関しては北西インド語全体の再検討を要する。

(6) 中期インド語史上注目すべきは、パーリ古層には見られない語尾 -eyā (ー) の確実な用例である。この語尾は Mahāvastu 中ですでに使用され、起源が新しくはないことが知られていたが、スバシ写本は年代的基点をはじめて与えたことになる。

また -eyya も y の二重化によって注意を引くが、用例が一度であり、広く検討する必要がある。

### Ⅲ．結 語

スバシ写本は、ポプラ材の薄板に書かれ、書体上、および Udānavarga の本文発展史上、紀元300年前後に、中央アジアのクチャー（庫車）地方で筆写されたと推定される。これ以上古い写本でこの地域から出土するものは、すべて貝葉に書かれ、書体上北西インドあるいは北インドから運ばれて来たと見られるものばかりである<sup>27)</sup>。従ってスバシ写本はクチャーの地で初めて筆写された写本に属する。この事情を、上

26) Mahāvastu においては、3人称・単数として -eyam が使われる (BHSG §29.31) が、後に唇音が来ない時にも使われるから、スバシ写本のこの用例をその先駆と見なすには無理がある。

27) [NAKATANI 1978: 6-15] 参照。

記の願望法語尾の分析と引き合わせる時、この写本は、この地で行われたサンスクリット化への第一歩を画すものだったことが判明する。

伝統的語句表現を踏襲し、中期インド語の韻律を乱さないことを原則としたこの写本は、サンスクリット化をその範囲内に限定し、中期インド語尾 *-eyā* を全面的に容認する措置を取った。また原本の音韻が時として混入するのを意に介さなかったことは、*-e* (= *-et*) を一定条件下に使うことなどによって知られる。このような、伝承詩句、従って伝統的韻律の遵守、音韻環境に左右される綴字、等のスバシ写本の特徴は、この写本が中期インド語原本の伝承とまだ密接な関係にあったこと、すなわちガンダーラ語による伝承を維持していた僧侶らの近辺でサンスクリット化が実行されたことを示すだろう。同時にそれは、ガンダーラ語よりもサンスクリットを難解としない人々の存在をも前提としている。しかもサンスクリット化に意図的制限を加えていることからしてあくまで実用をめざしたものであって、たとえば唱和や説教時のテキストなどとして使用されたのではなかったろうか。

ひるがえって、一般に、中期インド語仏典のサンスクリット化という事態を考える時、勿論その事情は、地域や時代、部派、仏典の種別等によって種々異なっていたはずであろうが、総じてこのように、サンスクリット化実行者たちにとって、原中期インド語が全く疎遠でないにせよ理解の容易なものではなくなったという状況が存在したと思われる。そこから文化伝達言語として高度の発達を遂げたサンスクリットへの翻書が企図されることとなったのであろう。つまり、冒頭のビナヤの話に見たような、バラモンが宗教特権階級としての威信を振りかざしていた時代からは既に五百年を経た異質の世界（クシャーナ朝）において、仏陀が憂慮した事態とは逆の事態が生じたわけである。

高度の専門知識を要する論書類のサンスクリット化は、これに先行して北あるいは北西インドで実行されたのであるが [WALDSCHMIDT 1965]、僧侶のみならず、在俗信者をも対象とする [中谷 1981: §4] 常用経典としての仏教詩集 *Udānavarga* のサンスクリット化への一歩は、母国ガンダーラの地を離れ、ガンダーラ語に不慣れの僧侶もその数を増したクチャーの説一切有部教団において、こうして踏み出されたのであった。そしてこれが、ドイツ隊が中央アジアからもたらした200種700にのぼる写本によって編纂されたベルンハルト本 [BERNHARD 1965] に見られる完全な仏教サンスクリット版に至るには、この後3、4世紀を要したのである。

## 略 号 表

- BHSG: EDGERTON, Franklin 1953 *Buddhist hybrid sanskrit grammar*. New Haven: Yale University Press.  
 GPS: PISCHEL, Richard 1900 *Grammatik der Prakrit-Sprachen*. Strasburg: Karl J. Trübner.  
 IA: BLOCH, Jules 1950 *Les Inscriptions d'Asoka*. Paris: Les Belles Lettres.  
 KDCT: BURROW, T. 1937 *The Language of the kharoṣṭhi documents from Chinese Turkestan*. Cambridge: Cambridge University Press.  
 PLS: GEIGER, Wilhelm 1916 *Pāli Literatur und Sprache*. Strasburg: Karl J. Trübner.  
 VB: SMITH, Helmer 1950 *Les deux prosodies du vers bouddhique*. Lund: CWK Gleerup.  
 VM: ARNOLD, E. Vernon 1905 *Vedic Metre*. Cambridge: Cambridge University Press.

## 文 献

- ANDERSEN, Diens  
 1907 *A Pāli Glossary*. Copenhagen: Gyldendalske Boghandel, Nordisk Forlag.  
 ARNOLD, E. Vernon  
 1905 *Vedic Metre*. Cambridge: Cambridge University Press.  
 BAILEY, H. W.  
 1946 Gāndhāri. *BSOAS* 11: 764-797.  
 BECHERT, Heinz (ed.)  
 1980 *Die Sprache der ältesten buddhistischen Überlieferung*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.  
 BERNHARD, Franz  
 1965 *Udānavarga: Einleitung, Beschreibung der Handschriften, Textausgabe, Bibliographie*, Band I. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.  
 1968 *Udānavarga: Indices, Konkordanzen, Synoptische Tabellen*, Band II. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.  
 BLOCH, Jules  
 1927 Quelques désinences d'optatif en moyen-indien épigraphique et littéraire. *Mémoires de la Société de Linguistique de Paris* 23(2): 107-122.  
 1950 *Les Inscriptions d'Asoka*. Paris: Les Belles Lettres.  
 BROUGH, John  
 1954 The Language of the Buddhist sanskrit texts. *BSOAS* 16: 351-375.  
 1962 *The Gāndhāri Dharmapada*. London: Oxford University Press.  
 1980 Sakāya Niruttīyā: Cauld kale het. In H. Bechert (ed.), *Die Sprache der ältesten buddhistischen Überlieferung*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, pp. 35-42.  
 BURROW, T.  
 1937 *The Language of the kharoṣṭhi documents from Chinese Turkestan*. Cambridge: Cambridge University Press.  
 EDGERTON, Franklin  
 1953 *Buddhist hybrid sanskrit grammar*. New Haven: Yale University Press.  
 GEIGER, Wilhelm  
 1916 *Pāli Literatur und Sprache*. Strasburg: Karl J. Trübner.  
 HINÜBER, Oskar von  
 1982 Die Bedeutung des Handschriftenfundes bei Gilgit. *ZDMG*, Supplement V, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, pp. 47-66.

- 1983a Sanskrit und Gāndhāri in Zentralasien. *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, pp. 27–34.
- 1983b *Notes on the Pāli Tradition in Burma*, Nachrichten d. Akad. d. Wiss. in Göttingen. I. Philol. -Hist. Kl. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- NAKATANI, Hideaki
- 1978 *Udānavarga*. Édition critique du manuscrit sur bois de Subaṣi (BN, fonds Pelliot). Paris: Institut de Civilisation Indienne (in press).
- 1984 Remarques sur la transmission des Dharmapada. *Bulletin d'études indiennes* 2: 125–141. Paris: Association Française pour les Etudes Sanskrites.
- 中谷英明
- 1981 「Dharmapada における jñāna, saṃvara, nirvāṇa——仏教最古の教義と実践の一側面」『日本仏教学会年報』47: 31–55.
- 1982 「インドにおける聖典の書写と口承」『民博通信』17: 37–41.
- 1985 「スバシ写本とコンピュータ」『民博通信』27: 61–75.
- NORMAN, K. R. & E. M. HARE (eds.)
- 1973 *Pali Tipiṭakam Concordance*, Vol. II. London: Pali Text Society.
- PISCHEL, Richard
- 1877–1880 *Hemacandra's Grammatik der Prakritsprachen*. Halle: Buchhandlung des Waisenhauses.
- 1900 *Grammatik der Prakrit-Sprachen*. Strasburg: Karl J. Trübner.
- RĀJENDRALĀLA MITRA
- 1882 *The Sanskrit Buddhist Literature of Nepal*. Calcutta.
- RENOU, Louis
- 1957 Introduction générale. In Jacob Wackernagel (ed.), *Altindische Grammatik*, Nouvelle édition, Tome I. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, pp. 1–125.
- ROTH, Gustav
- 1980 Particular Features of the Language of the Ārya–Mahāsāṃghika–I. okottaravādins and their Importance for Early Buddhist Tradition. In H. Bechert (ed.), *Die Sprache der ältesten buddhistischen Überlieferung*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, pp. 78–135.
- SANDER, Lore
- 1968 *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
- SĀṆKṚTYĀYANA, Rāhula
- 1935 Palm-leaf manuscripts in Tibet. *Journal of the Bihar and Orissa Research Society* 21: 21–43.
- SMITH, Helmer
- 1950 *Les deux prosodies du vers bouddhique*. Lund: CWK Gleerup.
- 1951 Retractationes rhythmicae. *Studia Orientalia Fennica* 16(5): 3–37.
- 1954 Analecta rhythmica. *Orientalia Suecana d'Upsala* 19(7): 1–17.
- STEIN, Sir Aurel
- 1931 Archaeological Discoveries in the Hindukush. *Journal of the Royal Asiatic Society*. pp. 863–865.
- TURNER, Sir Ralph Lilley
- 1960 *Some problems of sound change in Indo-aryan*. Poona: University of Poona.
- 1967 Geminates after long vowel in Indo-aryan. *BSOAS* 30(1): 73–82.
- WALDSCHMIDT, Ernst
- 1965 *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*, Teil I. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.